

コンテキストの構造と分類

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 河原, 修一 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/3583

コンテキストの構造と分類

——文法論としての可能性——

河原修一

序

統語法シンタククスによる構文論は、意味とは無関係に文を構成しうること(注1) (統語法によって無限に文を生成しうること(注2)) を基本にしている。

いわば、テキスト(言語表示)における形態的な構成による構造を論じる、徹底したテキスト文法である。言語表現によって生じる意味と関わるコンテキスト(非言語的要因非言語的要因)は排除して、立論される。ところが、統語法による構文論を日本語に適用しようとする様々な試みのなかで、日本語にはコンテキスト依存型の構文もあることに気づかれ始めた。

田中君は学生だ。①

田中君はうなぎだ。②

たとえば、①はテキストだけで理解されるが、②はコンテキスト(話し手と聞き手とをめぐる状況)なしには理解されない。コンテキストは、食堂での注文、魚釣り、学芸会での役割、好きな食べ物、嫌いな食べ物、好きな生き物、嫌いな生き物、学術的研究の対象な

ど、様々でありうる。文意もコンテキストに応じて、それぞれ異なってくる。

①に示される構文によって、②をテキストだけで見ると、論理的に矛盾する。②をコンテキストも含めて見るとき、①と②とは別の構文によっていることが知られる。つまり、構文の形態と論理的構成が一対一に対応しているとは限らない(注1)。同じ形態であっても、コンテキストなしには、対応する論理的構成はわからない。

雪だ。③

③も、コンテキスト依存型の表現である。コンテキストは、旅行者の情趣、子供の雪合戦、若者のスキー、住民の雪かき、商業関係者の輸送困難と野菜の値上がりなど、様々でありうる。文意もコンテキストに応じて、それぞれ異なってくる。

風が吹くことだ。④

④はコンテキスト依存型とはいえないが、文意がコンテキストに影響される。確かに④には「風が吹く」という外界の事態(事柄)が写されているが、話し手の主旨(表現意図)はむしろ「風が吹く

こと」に寄せる感慨（現在の心境、過去の回想、将来への抱負）を示すことにある。どのような感慨を託しているかは、話し手の境遇（人生経験）というコンテキストによって異なってくる。

言語表現は、テキスト（言語表示）とコンテキスト（非言語的要因）とから成立している。一方、構文の枠組は、形態と論理的構成とが相俟って定まる。論理的構成には、意味も関与する。テキスト文法だけでなく、コンテキストを含む文法の可能性も考えられてよいのではないか。

統語法による構文論（言語構成的な把握）に対しては、すでに時枝誠記や佐久間鼎が総論的に批判し、構文の成立に際してのコンテキストの関与について言及している。一方、三尾砂は具体的にコンテキストに言及するが、テキストに沿った脈絡が働いてつくられた結構を文法論の対象とし、テキストとは直角に交わって広がる場合は、脈絡のないものとして、文法論の対象外とする。

そこで、コンテキストを含む文法の可能性について考えていく前提として、コンテキストの構造と分類に迫ってみたい。

一、言語と言語表現

個人の意識に内在する枠組としての言語は、社会的な約束に基づく記号体系として（その時点で）普遍性を持ち、見えないもの（聞えないもの）であるが（鑄型のように）様々な言語表現の基底をなす。枠組としての言語をモデルとして、個人が具体的な場面で様々な言語表現をなすが、共通しながらも同一ではなく、それぞれ差異

がある。言語表現は、実際に見えるもの（聞えるもの）であり、具体的な形となったものである。（形象化以前の）言語と言語表現とは、言語事象としては一体であるが、次元が異なる。

言語伝達は言語表現に含まれる。言語表現は独言もありうるが、言語伝達では、言語主体として、表現者だけでなく受容者を必要とするから、表現者は同時に伝達者でもある。言語表現における素材は、同時に言語伝達における情報でもある。情報には、テキスト（言語表示）による情報と、テキストによらない（言語外の）情報とがある。伝達者（伝え手）と受容者（受け手）と情報（伝えるもの）とは、言語伝達の三要素といわれているが、伝達は場なくしては成立たない。ここで、伝達者、受容者、テキストによらない情報に関わるコンテキスト（場面・心理・文化などテキストと共にあるすべての要因）を考えざるをえない。

なお、コンテキストは、記号の材料（音韻・文字）の違いに影響されるが、ここでは文章語も視野に入れつつ、談話語を中心に考えていく。

以上述べたことを簡略に「図1」に示す。

言語表現

個人による具体的な表現 (個別的実現)

個別的実現による差異性 (ずれ・ゆれ)

記憶された語彙 / 体得された文法

(↓個人差)(コンテキスト)

個別的主体としての表現主体

判断して表現する素材

(〜心情を含む)

具体的な状況 (コンテキスト)

形象化以前の言語

言語集団に属する個人に内在する枠組 (モデル)

枠組としての普遍性 (↓枠組は変わりうる)

言語集団内の約束に基づく記号体系

(記号を記号たらしめる約束 / 記号の組合せについての約束)

理念的主体としての認識主体

認識する対象 (モノ)・事象 (コト)・性質 (サマ)

* (〜自己認識を含む)

言語伝達

伝達者 (話し手 / 書き手)

情報 ← テキストによる情報

← 受容者 (聞き手 / 読み手)

← テキストによらない情報

コンテキスト (伝達の場合)

声こゑ音・表情・身振り・手振り / 筆跡・表記

心理 (表象・内言)

時・所・場合 (人間関係を含む)

時代背景 (生活感情・価値観など)

話し手と聞き手に共通する知識・認識

(語彙・文法、社会的常識・民族的通念、生活経験、位相など) テキストの脈絡と一貫性についてのよみとり

二、テキストとコンテキストとの関係

言語表現または言語伝達は、テキスト (言語表示) とコンテキスト

(非言語的要因) とから成立していることについて、述べてきた。

テキストは、原則として、時間の軸に沿って線条的にのびる脈絡

をもつ。コンテキストは、テキストと共にあるもので、非言語的要因のうち、言語主体および言語表示と有機的に関わるものである。

発語場面 (場面的コンテキスト) に対する話し手の意識 (心理的コンテキスト) として、言語表現以前に、刺激に対する表象 (意識に映じた像) があり、そのまま感覚となったり、場面を超えて直観

[図 1]

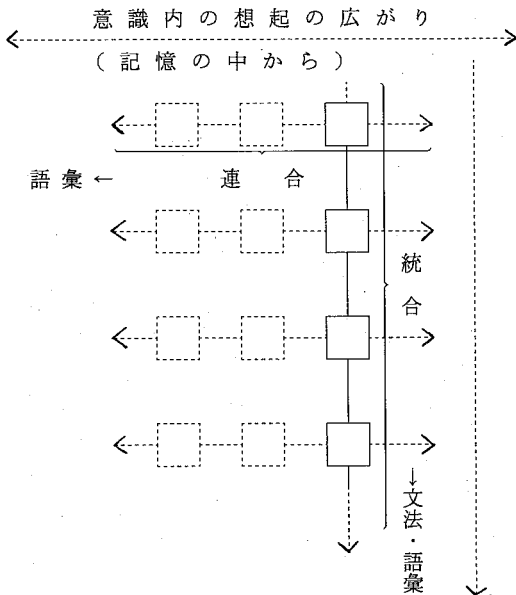
が閃いたりする一方、表象からさらに認知・判断・思考へと進んだり、また、感情・欲求・意志へと進んだりする。以上は、言語表現以前の心理的コンテキストであり、時間のなかに置かれたゆるやかな脈絡としての流れであるが、段階的である。

形象化以前の言語という枠組は、世界に対する認識のあり方を示し、対象・事象・性質の諸関係という論理を表すが、世界に対する載り取り方や関係づけは言語集団(部族・民族)によって異なるから、(言語も文化であるという意味で)文化的コンテキストとして、言語表現の基底をなす。

言語表現以前の心理的コンテキストのうち、思考は内言によって組立てられる。沈黙の思考は言語的構造をもつ。そもそも形象化以前の言語という枠組が論理を表すからである。感情は必ずしも論理的ではなく、言語という枠組を借りて表現することになる。感覚や直観は、非論理的かつ反射的で、本来、言語によって表現しかねるものであるが、いわば別次元の枠組へ翻訳して表現するほかはない。

さて、発語場面に對して、言語表現に向かう話し手の意識として、内発的または外発的な動機(意図)があり、表現への志向となり、意識的または無意識的な意図が生じる。

言語表現に向かう心理的コンテキストは、



〔図2〕

時間軸に沿った脈絡をもち、テキストの生成に関わる。発語場面に對する話し手の意識として、記憶の中に蓄積された語彙から連想を働かせ、適切な語を選択し決定する一方、体得された文法(統語法)や位相的知識によって、統語的・意味連関的な適否を判断しながら、語と語を連結していく。ソシユールの用語も借りながら、簡略に〔図2〕に示す。実線部分はテキスト、点線部分は心理的コンテキストである。

〔図2〕で、統合に関わる心理的コンテキストは、時間の軸に

時間的な継起の順序(時間の軸に沿って)

沿った線索的な脈絡（連続的なつながり）をもつが、連合に関わる心理的コンテキストは、時間の軸を極小にしたほとんど瞬間的な連想であり、線であったり点として飛んだりするゆるやかな脈絡（断続的なつながり）をもつ。

発話前、発話中、発話後を通じて、観念構成の試行錯誤をくり返しながら、内言によって表現の適否の判断と評価を並行している。時には、感情・感覚・直観などを表現しようとして、連想可能性・

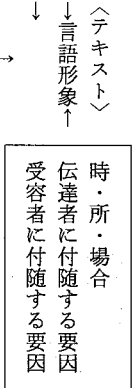
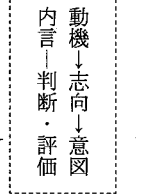
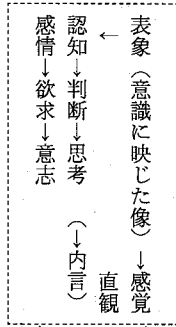
世界（対象・事象・性質）

刺激

言語の枠組（文化的コンテキスト）

（言語表現以前の）
（言語表現に向かう）
（心理的コンテキスト）（心理的コンテキスト）

（場面的コンテキスト）



時代背景・民族的通念（文化的コンテキスト）

伝達者の意図（意識的／無意識的）
（テキストの脈絡と一貫性）

受容者の解釈
（類推・洞察など）

（よみとりの）（心理的コンテキスト）

連続可能性の枠組からのずらしによって、詩的な表現を試みることもある。内言による評価は、話し手の自意識によるが、聞き手の反応によって、フィード・バックされることもある。

テキストの脈絡と一貫性については、話し手の意図に対する聞き手の解釈（よみとり）という心理的コンテキストも関わってくるが、聞き手が話し手の無意識の意図をよみとることもある。ところで、発語場面（場面的コンテキスト）なしには言語表現ま

〔図3〕

たは言語伝達は成立たない。発語場面には、時・所・場合という現場と、その現場にいる話し手と聞き手に付随する要因とがある。話し手・現場・聞き手という空間軸に沿った場面的コンテキストは、(テキストを媒介とした)話し手の意図と聞き手の解釈に結びつけられる内在的・外在的な一切のものを含み、広がり(面)としてのゆるやかな脈絡(網の目状のつながり)をもつ。ただし、時間軸に沿って線条的にのびるテキストに対しては、いわば横切る形で面として広がる。

ところが、発語時の現場や心理を越えた時代背景や民族的通念も、テキストによらない(言語外の)情報として、間接的にコンテキストの形成に与かってくる。いわば時間軸を超えた文化的コンテキストであり、ふくらみ(立体)としてのゆるやかな脈絡(奥行のある網の目状のつながり)をもつ。話し手・聞き手にとっては、ほとんど意識されないことも多い。

心理的コンテキストはテキスト以前またはテキストに沿ってあるもの、場面的コンテキストはテキストをいわば横切つてあるもの、文化的コンテキストはテキストの背景にあるものである。

以上述べたことを簡略に「図3」に示す。実線囲みは場面的コンテキスト、点線囲みは心理的コンテキストである。

三、コンテキストの分類

言語表現または言語伝達において、テキストの実現・評価に関わる言語主体(伝え手・受け手)の心理的な流れや動きを、心理的コ

ンテキストとする。心理的コンテキストは段階的に、言語表現以前のもの、言語表現に向かうもの、よみとりの三つに分けられよう。このうち、言語表現以前のものと、言語表現に向かう連想可能性とは、ゆるやかな脈絡、言語表現に向かう連結可能性とよみとりとははっきりした脈絡をなしている。

言語表現または言語伝達において、発語時に現場を構成する一切の外在的・内在的な要因を、場面的コンテキストとする。場面的コンテキストは、テキストによらない情報に直接的に関わる。場面的コンテキストは、話し手・聞き手に付随する外在的または内在的なものと、話し手と聞き手をめぐる発話時の場面とに分けられる。場面的コンテキストの核をなすものは、話し手と聞き手の関係である。心理的コンテキストの核をなす話し手の意図は、テキストの実現を指すものであると同時に、話し手と聞き手の関係に応じて、テキストによらない情報の伝達を指すものでもありうる。話し手・聞き手の声音・表情・身なり・態度・動作につながりがあるとすれば、それは話し手と聞き手の関係がつくり出すつながりである。また、テキストをめぐる話し手の意図と聞き手の解釈との整合性については、話し手・聞き手に内在するもののうち、共通するものが多ければ相互理解に、相違するものが甚しければ誤解にいたると一般的には言えるが、話し手と聞き手の関係にもよるのである。つまり、話し手と聞き手の関係が場を有機的に構成し、場面的コンテキストの構造をなすと言えよう。

言語表現または言語伝達において、発語時の現場や心理を越えた背景をなす文化的要因を、文化的コンテキストとする。文化的コン

テキストは、テキストによらない情報に間接的に与かる。文化的コンテキストは、時代の流行に関わる時代背景と時代の流行に関わらない民族的通念、さらに言語という枠組に分けられる。文化的コンテキストは、心理的コンテキストおよび場面的コンテキストの背景をもなしている。外国人の日本語学習者が、文法・語彙にかなり習熟していても、表現の意図を誤解することもあるのは、文化的コンテキストを理解していないことによる。

次に、コンテキストの種類について、具体的な項目も含めてまとめてみる。

A 時間軸に沿った心理的コンテキスト

-----線条的な(連続的または断続的な)脈絡

(1) 言語表現以前の心理的コンテキスト(意識的/無意識的)

ア 表象(意識に映じた像) ----- 非言語的な印象

a 知覚表象(対象が現前している場合) (形・色・音・)

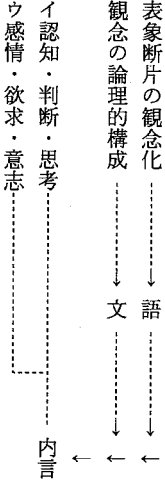
b 記憶表象(記憶によって再生される場合) 動きなど)

c 想像表象(想像による場合)

言語的形象への過程

表象断片の観念化

観念の論理的構成



エ 感覚・直観

※夢(偽の現実)は(bまたは)cに近い。

a ↓ 現実 b ↓ 現実の再生 c ↓ 偽の現実(虚構)

(文学との関わり)

(2) 言語表現に向かう心理的コンテキスト(意識的/無意識的)

ア 動機・志向・意図

イ 内言(発語されない意識内言語)

発話前の予備的内言

諸観念 ↓ 試行錯誤的な構成予想

↓ 発語される語の選択・決定 ↓ 発語

発話中の並行的内言

連想可能性 ↓ 表現の適否の判断と評価 ↓ 自意識

(語彙) ↓ 接続する語の選択・決定

連結可能性 ↓ 観念構成の試行錯誤

(文法) ↓ 発語されなかった諸観念 ↓ 残存

☆ 連想可能性・連結可能性の枠組からのずらし ↓ 詩的言語

発話後の余韻的内言

表現された発話文 ↓ 余韻的な感情の加わった評価の内言

↑ 話し手の自意識
聞き手の反応

(3)よみとりの心理的コンテキスト

テキストに託された伝え手の意図(意識的/無意識的)

→

テキストに沿った受け手の解釈(よみとり)

……類推・洞察など

B 空間軸に沿った場面的コンテキスト

……広がり(面)としての(網目状の)脈絡

(1)話し手に付随するもの

ア音声……言語音↗音質・大小・訛り(音韻的なずれ)

アクセント(強弱・高低)・抑揚

表情音(笑い声・泣き声・叫び声・舌打ち・咳払い)

欠伸・溜息・鼻吸り・嘔など)

イ表情

ウ身なり(服装・髪型)

エ身振り・手振り↗動作音(拍手・足踏み・指弾きなど)

慣習的なもの、個人的な癖、態度

オ動作

(2)聞き手に付随するもの

ア音声……言語音↗相槌

表情音(笑い声・泣き声・叫び声・舌打ち・咳払い)

欠伸・溜息・鼻吸り・嘔など)

イ表情

ウ身なり(服装・髪型)

エ身振り・手振り↗動作音(拍手・足踏み・指弾きなど)

慣習的なもの、個人的な癖、態度

オ動作

(3)話し手・聞き手に内在するもの

共通するもの ↓相互理解

相違するもの ↓誤解

ア語彙的知識・理解

イ文法的知識・理解

ウ言語的位相に関する知識・理解……性別・年齢・階層

時代(流行語)・地域(方言)・待遇(敬語)など

エ一般的知識・理解(学識・教養・社会的常識)

オ個人的な生活経験の蓄積

カ個人的な知能・判断力、性格、信念、趣味、習慣

体調(健康状態)、気分(心情)

(4)話し手と聞き手をめぐる発話時の場面(現場)

ア時間……季節・時刻

イ場所

ウ事物関係……話し手と聞き手の関係(親疎・地位・長幼・利害など)

環境↗事物の配置(自然環境・家屋・工作物・器物など)

行事(例)運動会・カラオケ大会・送別会など

事件(出来事)の局面↗話し手と聞き手の経験

事件(出来事)の誘因(原因・契機・理由)

C 時空間軸を越えた文化的コンテキスト

……ふくらみ(立体)としての(奥行のある網目状の)脈絡

(1)時代背景……時代の流行をなす生活様式・文化的現象

ア生活感情(嗜好・遊興・芸能・スポーツなど)

イ価値観(思想・宗教・道徳など)

ウ美意識(芸術・デザインなど)

(2)民族の通念……時代の流行に関わらない民族的感情・伝統的思

考法

ア儀礼(儀式・祭礼・作法など)、習俗(慣習・風俗)

イ民族的な生活経験の蓄積……生活手段(農耕・牧畜など)

生活形態(民俗) ↑ 風土(気候・地形)

(3)言語……言語集団(部族・民族)内の約束に基づき記号体系

ア文法

イ意味……辞書の意味、修辭の意味

四、テキストとコンテキストの関係を示す構造

コンテキストの種類相互関係について、テキストとの関係も含めて、〔図4〕に示す。

時間軸に沿ったテキスト

《外在的》

時間軸に沿った 心理的 コンテキスト 《内在的》	空間軸に沿った 場面的 コンテキスト 《外在的》 《内在的》
-----------------------------------	--

時空間軸を越えた
文化的コンテキスト
《内在的》

言語という記号体系
《内在的》

〔図4〕

五、コンテキストをなす各要素についての事例

コンテキストの種類ごとに構造を明らかにし、文法論的に論じるまでに至らないが、前段階として、三で分類した各項目または各要素を、テレビのトーク番組の談話のなかから取出してみる。(なお、〔 〕は前の発言者と同時に重なる発言であることを示す。)

(a) 『びっくりトーク ハトがですよ』

日本海テレビ

(1995・1・16放送)

ホスト (インタビュアー)

関口 宏 (五〇代)

サブ・ホスト 山田 邦子 (三〇代)

ゲスト 金子 信雄 (七〇代)

VTRナレーション

どうすれば料理をおいしく作る
ことができるか。金子さんに言
わせれば、料理は理を料ること、つまり、いかに頭を使って料理に自分なりの工夫をするかが大事なことだと言います。手間をかけるのがイヤではおもしろいものができるはずはないとまで言うのです。ところが、現代人の食生活には工夫や手間のかからないものばかり。…〈中略〉…世界の食文化はまさに絶滅の危機に瀕しています。伝統的な料理を嫌い、世界中、同じような食べ物を好む時代。…金子さん、こんな時代をどう思いますか。非常に悲しいことです。

〔関口 ① んー〕

① 相槌 (同意)

金子 ② わたしが料理番組、もうTBSが始まりで、引き受けたのね。そういう奥様がふえたからやってくれないかって、もう二十年ぐらい前ですよ、始めたのは…で、フランス人ね、

② 発話中の判断と評価
* 文法的語順↑補正

③ やなんか、あの、は、昼めしでも二時間ぐらいかけた。だから非常に健康的だったけど、この頃フランスの皆さんも、

③ 発話中の評価↑補正
(選別意識への狼狽)

④ そういうふう簡単に済ませるようになった。⑤ ま、一家団欒って言葉がありますからね、

④ 現場 (共通経験としてのVTR)

⑥ あー、囲んでね。

⑤ 発話中の判断
(要拙速)

⑦ いまーないかもしれないね。

⑥ (語彙的な) 観念構成 (連結可能性) の
試行錯誤

⑧ スナックみたいなものがたくさん、

⑦ 発話中の判断と評価
「どこでも」の言いさし

⑨ ま、⑩、すぐ手に入るでしょう。

⑧ よみとり (補足・要約)

⑪ 簡単だね、ええ。」

⑫ 囲んでね、だから、みんな、

⑬ こう食卓を囲む楽しさってのがねえ、なんかなくなっちゃって

⑭

⑮

⑯

⑰

⑱

⑲

ねえ。

〔山田 んー〕

金子 それはね多少非行にもつながらるんです。

〔関口 ⑨だ、あるでしょう。〕

〔山田 お、そうですか。〕

金子 親は、コミュニケーションがないから……。

〔関口 んー〕

〔山田 はー、はー、はー、はー、はー〕

金子 昔はねえ、おじいちゃんが、いろいろ話してくれたり昔の話をね、それをこう、食べながら、^⑩き、偉いおじいちゃんだなあと思いつながら食事したもんですね。

〔関口 んー〕

山田 でも、ハンバーガーもたまにすごく食べたくて……。好きなんですよー、わたしは……。

金子 自分で作んなさいよ……。

山田 ……。^⑪〔口を開けたまま答ええない。〕

〔関口 売ってるのじゃなくて。〕

〔会場 (笑)〕

⑨発話中の判断と評価
「たしかに」の言いさし

⑩発話中の判断と評価
「聞いて」の言いさし

⑪関手の表情↓沈黙の
意図(絶句の演出)

〔金子 ⑫ふっふっふっ〕

関口 ⑬こーら、時間がかかって大変ですよ。

山田 ⑭わたくしはいま⑮フィックスしてしまいましたが、⑯から、買いに行ったらあ、簡単に買えちゃうんで……、これがねえ……。

〔関口 ねー〕

山田 ⑰だーから、作るよりも⑱いいやーなんて思っちゃって……。

金子 だからあれはーあまりおいしいもの
ごさいませんからね。

山田 ⑲ほうですか。

関口 売ってるものに慣らされちゃうと
ね……。

〔金子 そーそーそー〕

関口 家で作った手作りのね、ハンバーガー、物足らなかつたりするんだよ……。

金子 それはこの頃のお子さん、^⑳そういうの多いらしいよ。

関口 なんかあるんだよ、そういうこと……。^㉑ま、そういう話になるん
でしょうが……。^㉒ま、もう一つVTRが^㉓びびりますので、ちょっと

⑫表情音(笑声)(抑捺)

⑬現場

(人間関係の変化)

会場の和み↓無意識

⑭⑮位相

⑯言い間違

⑰⑱位相(若者ことば)

「買いに行ったら」

⑲現場(会場の雰囲気)

⑳よみとり

㉑発話中の判断

(性急)

㉒位相(敬語)

↓言外の意図

(場面移行伝達)

こちらの方を②ご覧下さい。(早口で)

山田⑩おしいけどなあ……。 (一人言ふうに)

(b) 『ソリトン 金の斧銀の斧』

NHK教育テレビ

(1995・3・4放送)

ホスト

大塚 寧々 (二〇代)

ゲスト

山田玲央名 (三〇代)

ゲスト

千秋 (二〇代)

キャプション「まず お茶を……」

寧々①なんか、②ひな、③ひなまつりの……

玲央 あまりものですね。

寧々 なんか、あるよ。③誰かが用意してくれた……

玲央④あまりものを、わたしたちに。

千秋⑤食べませんか？④これ、しげって

るかもしれないじゃん。

寧・玲⑤はははは……

寧々⑥これ、頼むわ。(急須、湯呑み、茶壺

を千秋に差し出す。)

千秋⑦うん。

千秋 (玲央名に向かって) でも、お茶っ

②談話後の評価
(発語されなかった
諸観念の残存)

①話手の表情

(バツの悪さ)

②話手の音声(吃り)

③話手・聞手に共通する文法的知識

統語法↓心理的な脈

絡

④社会的常識

⑤笑声(ごまかし)

⑥現場(事物の配置)

⑦話手・聞手の関係(親

密) ↓(ラフな) 態

度・身なり

て、どうやって入れるのかわかる？
(玲央名が少しあきれ顔になる。)

ここに⑧入れたら、葉っぱ⑨入れたら、葉っぱにお湯を⑩入れたら、お茶になるの？

玲央 なる。

千秋⑨そのまま入れて……？

玲央 いいよ。

寧々 いいよ、うん。

(千秋が三つの湯呑み茶碗に茶の葉を入れて、それぞれに湯を注ぐ。)

玲央⑩はああっ!! (高く鋭い声で)

寧々⑪ええっ!! ⑫ははは…… だっ

て…… ⑬ははは……

寧々⑭これはわたしもはじめて見たかも知れない。⑮ははは……

寧々⑯これ、千秋さん、どうやって飲むの？

千秋 沈むの 待って……

寧々 ははは……

千秋 (玲央名に向かって) おいしい？

玲央…… ⑰まずそんな顔をして)

千秋 (さらに高い声で) ⑱おいしい？

玲央…… ⑲千秋に向かってニコッと

⑧テキスト(繰返し)

↑話手の心理(不安)

⑨話手の音声

(イントネーション)

↑心理(訝しき)

⑩⑪表情音に近い言語

音(音程・音質)

↑心理

⑫驚愕・反問

⑬表情音(笑声)(呆れ)

⑭現場(出来事の局面)

⑮現場(事物の配置)

⑯⑰聞手の表情

(↑親密感)

⑱⑲話手の音声

(イントネーション)

↑心理(甘え)

笑って)

千秋 ⑮結構なお点前?

玲央 ⑯こーんなままずいお茶、はじめて飲んだ。はっ(笑)

千秋 ⑰もうかなあ?

寧々 ⑱いやなんか、最近、ねてもねても眠いの。ねてもねても

〔玲央 ⑲ねたりない?〕

ねてないんでしようけど……

千秋 ねむい病?

寧々 うん、これで桜とか咲き始めたら、もうもつとねむい病にかかっちゃう

う……

玲央 (低い声で) それ、恋人がいないせいでよ。⑳恋人、できた?

寧々 さあ……

玲央 恋人がいないと……(言い続けようとする。)

寧々 ⑳(笑いながら) 凶星だから、結構失礼なのよ、あなた、そんなはつきり

言われても……ははは……

玲央 恋人と㉑こう、すごい安心感のある

恋人に㉒こう、守られながらねているとー、ちゃんとねた感じするんだ

⑮話手の音声

(アクセント)

↑心理 (采れ返り)

⑰言い間違

(「そうかなあ」「そ

んなもんかなあ」)

⑲発話前の判断

(話題転換)

⑳よみとり (推察・補足)

語彙的統合↓心理的

脈絡

㉑話手の音声

(音程・音質)

話手・聞手の関係

(親密)

㉒話手の表情

(許容の伝達)

話手・聞手の関係

(親密)

㉓話手の身振り手振り

よ。

〔寧々 そー……?〕

玲央 一人でさびしくねてるとお、こう、なん時間ねても、なんかねたりない

ような……

寧々 ねたりないのかなあ……。

玲央 うん、

千秋 わたし、いちんち、十二時間ねる。

寧々 ㉔二十時間?

千秋 十二時間。ね、ママがねえ、ごはん

よってたら起きるの。それでまた

ねるの。

〔玲央 ㉕千秋ちゃんはー……

寧々 うん……〕

お母さんと住んでるからー、結構お

母さんがなんでもやってくれるんで

しょ?

千秋 うちが㉖オートマチックなうち。ふ

ふふ……

寧々 いま、ふき出しそうになっちゃった

〔玲央 ㉗オートマチックって……〕

千秋 おなかすいたーってたら、ごはん

ができてくるの。お風呂入りたいたら、お風呂入れる……

㉔聞き間違

↑無意識心理

㉕話手の音声

(イントネーション)

↑心理 (年長者)

㉖相槌 (同意)

よみとり (洞察)

㉗位相

(外来語、若者語)

時代背景

㉘位相 (世代差)

寧々 そう……か、いいね。

千秋 いいでしょ!?! (尻上がりに)

寧々 うん……

千秋 ③でも、ずっとできなくなっちゃった…… (消え入るような小声で)

寧々 ふふ…… (笑)

千秋 ④お茶の入れ方、⑤お茶の入れ方もできなくなつて、笑われちゃつた……

玲央 いや、いいよ、千秋ちゃん、⑥そのまままで。

寧々 わたしもそのまんまの方がいいと思

うよ。」

きつと……

玲央 うん、きつと、そのまんまでいいつ

ていう男の人がいるよ。

寧々 ⑦絶対いますよね。

玲央 うん。

千秋 王子様が?

玲央 王子様じゃないかも知らない、

ちよつとあの、中年とかさ

千秋 いやだーっ、はっはっは……

寧々 ははは……

玲央 いいよいいよ、なんでもいいよ、千

秋ちゃんのいうとおりにしたげるっ

③話手の音声

(イントネーション)

↑心理 (負惜み)

社会的常識 (欠如)

生活経験

個人的性格

③話手の音声 (大小)

↑心理 (反省・不安)

③テキスト (繰返し)

↑心理 (悲しみ)

⑤話手の音声

(イントネーション)

↑心理 (慰め)

⑥相槌 (同意・配慮)

⑦よみとり (洞察)

生活経験

ていう……。なんか……はっはっ……
③そういうタイプだよ、きつと
ね……

寧々 ③あのそういうことで、④なんかいろ
んな女の人の様子とかのビデオがあ
る④みたいなんで、④見ってみましょ
うか。(立ち上がる。)

(c) 『おしゃれカンケイ』 日本海テレビ

(1995・9・10放送)

ホスト (インタビュアー)

古館伊知郎 (四〇代)

サブ・ホスト マルシア (二〇代)

ゲスト 的場 浩司 (二〇代)

古館 聞いてますよ。高校生の頃、①ナン

的場 ②パ狩りしてたんでしょ?

えっ、そんな…… ③してないす
よ……

マル ④何、それ……、④貝掘りのこと?

六、文法論としての今後の可能性

文には、テキストだけで自立しうるもの (自律性をもつもの) と、

③生活経験

③発話前の判断

(要拙速)

④④テキスト (婉曲)

↑無意識心理 (狼狽)

④位相 (敬語)

↓言外の意図

(場面移行伝達)

①位相 (流行語)

時代背景

②話手の表情 (焦り)

③語彙的知識 (誤解)

「潮干狩」との混同

コンテキストが関与するもの(序②の例など)とがある。文の分類に際して、コンテキストを視野におさめざるをえない。絶対的な(形式主義的な)共時論ではなく、表現としての熟成の段階に^(注2)応じて、分類しなければなるまい。たとえば、現在の生物でも、進化の様々な段階を示しているようなものである。

コンテキストを視野に入れた文法の有効かつ必要と思われる対象として、反語表現(テキストでは疑問の形、コンテキストを含めて反語)、省略表現(テキストにはないが、心理的・場面的コンテキストによって補いうるもの)、山田孝雄のいう不完備句・喚体句による表現、筆者のいう直結表現、奥津敬一郎のいうウナギ文、山口佳也のいう「のだ」文^(注3)などが挙げられる。

文章論では、心中思惟文は心理的コンテキストにおける内言の成立として、場面的コンテキストの若干の関わりも含めて、扱えられよう。また、詩(心象スケッチと称されるものも含めて)などの文学作品についても、心理的コンテキストを中心に、文化的コンテキストも関わるものとして、扱えられよう。

最後に、コンテキストは構造化しうるかということに言及したい。心理的コンテキストは、テキストの生成に直接関わる脈絡をもち、外形をもたないが、仮説として構造化しうる。場面的コンテキストは、話し手と聞き手の関係を核として、外在的・内在的要因を問わず、仮説として構造化しうる。文化的コンテキストは、核となるものを見出せれば、仮説として構造化しうるかもしれない。構造化しうるものであれば、文法論的にアプローチできる。

コンテキストの構造に関しては、文法的構造とか意味的構造とか

の区分は、もはや意味をなさないであらう。ただし、言外の意味(テキストによらない情報)を問うとき、語用論との関わりも生じてこよう。

(注1)「論理的構文論においては記号の意味はいかなる役割も演じてはならない。」(ヴァイトゲンシュタイン著『論理哲学論考』奥雅博訳『ヴァイトゲンシュタイン全集1』四二頁)

(注2) チョムスキー著『文法理論の諸相』安井稔訳五頁参照。

(注3) 正確には、言語主体および言語表示に関わる非言語表示的要因。

(注4) チョムスキー著『言語理論の現在の問題点』橋本萬太郎・

原田信一訳『現代言語学の基礎』所収六頁参照。

(注5) 奥津敬一郎著『ボクハウナギダ』の文法』一二〜一三頁参照。

(注6) 拙稿「日本語の表現における認識の形式と意義」『金沢大学国語国文』第十七号所収四五〜四六頁参照。

(注7) 「海が静かだ。」「りんごが好きだ。」も同様の例。

(注8) 時枝は、一つの家屋を対象として観察する場合になぞらえる。

「家屋が成立する為には、それが建設される処の地盤が必要である。地盤は家屋の構成要素とはいひ得ないが、如何なる家屋も、地盤無くしては存在することが出来ない。且つ地盤によつて家屋自体の構造も制約されて来るのである。」(時枝誠記著『国語学原論』三九〜四〇頁)

(注9) 「形にあらわれたものだけを定着するにとどまって、形づくる所以のもの、形づくろうとするはたらきに向かつての見通しに到達することは望めなかった。」(佐久間鼎著『日本語の言語理論的研究』五七頁)

(注10) 時枝誠記著『国語学原論』四三〇四五頁参照。

なお、時枝は当初、構文という考え方をそのものを否定しているが、入子型構造は(表現機能に基づく)構文論にはかならない。

(注11) 三尾砂著『国語法文章論』『日本の言語学』第三卷所収四二〇四五頁参照。

(注12) 個別言語。

(注13) 言語を伴うコミュニケーション。ここでは、非言語伝達(ノンバーバル・コミュニケーション)に対立するものとしてでなく、広義に用いる。

(注14) 情報は、素材による情報だけではない。

(注15) 一般に、談話語では、文章語に比べ、コンテキストの関与が大きい。

(注16) 一般に、文章語では(韻文を除き)、談話語におけるコンテキストはテキスト化していく努力がなされる。コンテキストはまず談話語を中心に考えた方が、文章語(文学作品も含め)におけるコンテキストも明らかになると思われる。

(注17) 言語表示とは区別される。

(注18) ウォーフ著『原始共同体における思考の言語学的な考察』池上嘉彦訳『言語・思考・現実』文庫所収二九〇三二頁参照。

(注19) 主として心理的コンテキストに関わるが、時として場面的

コンテキストや文化的コンテキストに関わることもある。

(注20) 三尾砂は「話手の「つもり」と称する(前掲書)。

(注21) ソシュール『一般言語学講義』小林英夫訳一七二〇一七七頁参照。

(注22) 主として、意味連関の連結可能性。

(注23) 拙稿「言語表現における日常言語と詩的言語」『島根国語国文』第四号所収五五〇五六頁参照。

(注24) 言語表現以前のものをコンテキストに含めるかどうかは、論議の分れるところであろう。

(注25) 拙稿「日本語の表現における認識の形式と意義」『金沢大学国語国文』第十七号所収四六頁参照。

(注26) 同右四八頁参照。

(注27) 奥津敬一郎著前掲書で取上げられたような文。

(注28) 佐治圭三著「ことだ」と「のだ」——形式名詞と準体助詞——(その二)『国語学論説資料9』第三分冊所収一八九〇二〇四頁山口佳也著「「のだ」の文について」『国語学論説資料12』第三分冊所収一三四〇一四〇頁で、取上げられたような文。

参考文献(注に挙げなかったもの)

1 サビア著『言語—ことばの研究』泉井久之助訳(紀伊國屋書店)

2 木坂基著『近代文章の成立に関する基礎的研究』(風間書房)

3 小泉保著『言外の言語学—日本語用論—』(三省堂)

4 入谷敏男著『ことばの心理学』(中公新書)

付記

本稿は、一九九五年度金沢大学国語国文学会研究発表会での研究発表（1995・10・10）をもとに、まとめたものです。